2004(平成16年)6月27日(日曜日)(1)
VOL.06
●毎月第●日発行 ●発行部数 ●配布エリア 岩見沢市 三笠市 栗山町 月形
発行元：幾春別川ニュース編集委員会
編集委員長　嵯峨　義雄
〒068-0007
岩見沢市7条9丁目　石狩川開発建設部岩見沢河川事務所内編集委員会事務局
TEL：0126-23-9555　FAX：0126-25-1697

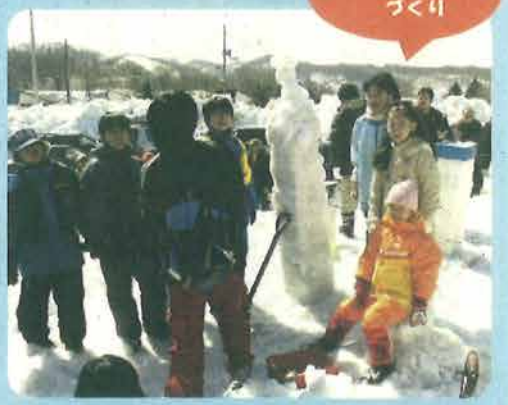
大好き！幾春別川
DAISUKI! IKUSYUNBETSU RIVER

川は遊びのガッコウ
三笠水辺の楽校（がっこう）「であい」

子どもたちは阿部先生のサポートのもと木のてっぺっんまで元気に登り、普段では見られない景色を楽しみました。

ツリークラインミングは、欧米の樹木医たちによる木の修復作業のための技術ですが、近年、アウトドアレジャーとしても普及し始めています。

秋田谷先生の説明のあと、グループでアイスクリームをつくりました。



スノータワーが完成してほっと一息。

雪がまだ残る3月28日、三笠市唐松町の水辺の楽校「であい」で、北海道水辺の楽校サミットが「三笠の滝・川・緑を愛する会」の主催で開かれました。水辺の楽校は、子どもたちが遊びを通じて自然に親しみ、自然を愛する心を育てることを目的に、平成8年に北海道で初めて造られた施設です。

北海道水辺の楽校サミットは、道内で川に関する活動を行う人たちの交流会議で、三笠市での開催は平成13年に続いて2回目。今回は、水辺の楽校の多面的な利用の実践、また、川の活動を行うときの安全管理について意見交換をしました。地元の小中学生や川の活動を行う団体の会員など約70人が参加。実践活動では子どもも大人も体を思い切り動かして、心地良い汗をかきました。

講師は、さまざまな雪遊びを考案している、本紙でもお馴染みの秋田谷英次さんと、川や山での遭難者の救助活動や、一般の人々にも普及させることを目的に救助方法を各種団体で教えている札幌市在住の阿部恭浩さんが参加。2人のユーモアを交えたお話のもと、楽しくプログラムが進められました。

参加者はスノータワーやイグルーづくり、缶を転がしながらのアイスクリームづくり、また、ハーネスとロープを利用した木登り（ツリークライミング）に挑戦。初めて体験する“遊び”に子どもたちは感動し、会場には驚きや喜びの声が響き渡りました。そのあと交流会も開かれ、水辺の活動について活発な意見が交わされていました。

連載 流域の野鳥 夏

涼しい風を感じながら双眼鏡と望遠鏡を持ち、幾春別川堤防を歩く。遠くに電車が走る音が聞こえ、ヒバリが空高くでさえずっている。

20数年前から見ると、幾春別川から眺める周りの風景も随分変わってきている。変わらないのが、遠くに見える夕張岳と樺戸連山、藻岩山。そして、天気の良い日には恵庭岳、樽前山がいつもの姿を見せてくれる。そんな風景を見ながら、毎年恒例の幾春別川の堤防歩きが始まる。

四季を通して野鳥を求め歩く。野鳥は季節と自然の豊かさを伝えてくれるバロメーター。ほとんどの野鳥は毎年同じ場所に戻ってくる。大好きなノビタキに出会えると「半年ぶりだね」と声をかける。ノビタキも「ただいま」と言っているかのように、元気にさえずりを繰り返してくれる。ほっとすると同時に、幾春別川は私の憩（いこ）いの場でもある。

同じ場所で何年も野鳥を見ていると、自然の変化を垣間（かいま）見ることができる。野鳥は自然を受け入れて生活し、子育てをしている。

今では観察が難しくなってきている野鳥もたくさんいる。多くの野鳥が安心して暮らせる場所は、私たちにとっても一番安心の出来る場所。みんなで知恵を出し合って、憩いのある空間を守り続けたい。

（岩見沢野鳥の会　若林　信男）

川の付近でよく姿を見ることができるノビタキ（オス）

水辺の楽校サミット

主催者紹介

「川は地球の血管みたいなもの」と川の偉大さを指摘する高篠さん。

「三笠の湖・川・緑を愛する会」の会長を務める高篠さんは、川を始めとする三笠の大自然のなかでたくさんの活動を行ってきました。「川のことを学ぶと森や海のこともわかり、自然は循環しているということが本当に実感できます」と自然界の現象について語ります。川は高篠さんにとって、身近な先生のような存在でもあります。

「今後は、川だけの活動に捉われないで、森や化石などの多様な三笠の自然環境を生かした幅広い活動を行っていきたいと考えています」。

高篠さんの夢はさらに広がります。

川遊びの達人

高篠和憲さん
TAKASHINO KAZUNORI

三笠市で堀川林業株式会社を経営。公私ともに自然を相手にする根っからのアウトドア派。三笠の自然をこよなく愛している。多忙にもかかわらず入念な準備のもと、今回のサミット開催を実現させた。

講師紹介

雪と土 アウトドアの達人たち

雪遊びの達人

秋田谷英次さん
AKITAYA EIJI

元北大低温科学研究所長で、日本の雪崩学研究の第一人者。現在は北星学園大学教授。北村に「雪と土に親しむ北の生活館」を開設し、四季を通して多彩な活動を行う。

「雪を邪魔者扱いするのではなく、雪に親しむことが北海道の冬を楽しく付き合う秘訣です」と今回も、木枠を使って雪を積み上げる「スノータワー」などの雪を使ったゲームと、雪遊びの“心意気”を子ども達に伝承しました。秋田谷さんは「自然を楽しむことができる人は幸せだと思います。そういう人がたくさんいると自然が大切にされていき、結果として“幸せな地球”ができるのではないかと思います」と雪を始めとした自然との関わりの大切さについて話していました。

雪遊びに関して詳しいことを知りたい場合は、電話（0126）56-2001（北村役場建設課治水対策係）まで。

レスキューの達人

阿部恭浩さん
ABE YASUHIRO

1981年から2000年までアウトドアショップ「秀岳荘」に勤務。退社後、リバーレスキュー、アバランチレスキュー、ロープレスキューの普及と啓発に努め、北海道はもとより、日本全国で活躍。

「自然のなかで過ごすということは、常に危険が伴なうということです。もちろん危険を避けることも大切ですが、万が一に備えた対処方法を学ぶことも非常に重要です」と、今回ツリークライミングを教えてくれた阿部さん。例えば川で溺れたとき、実際に川での泳ぎ方を体験していないと、自分はおろか他人を助けることもできません。アウトドアレジャーが盛んな現在、参加するすべての大人たちには、レスキュー（救助方法）を学ぶことが求められているようです。

レスキューに関して詳しいことを知りたい場合は、電話（011）684-6668または、090-8902-7635（阿部さん）まで。

連載 化石の宝庫 幾春別川 ①

古第三紀の植物化石

三笠市を流れる幾春別川沿いの山々は、日本でも有数の化石の産地として知られています。明治初期からアンモナイトを始め、貝類、植物、首長竜、翼竜など、たくさんの化石が発見されてきました。三笠の化石は日本人初の古生物学者、横山又二郎博士が19世紀末にドイツで出版した論文にも取り上げられており、日本の化石研究史上最も歴史があると言えます。

幾春別川で化石がたくさん見つかるのは、化石を多く含むいろいろな時代の地層が広く地表に露出しているからです。なかでもアンモナイトを含む約1億年前の白亜紀層は、化石を保存しやすい地層で、化石の質の良さは世界的にも有数です。こうした土地柄から地元に化石愛好家も多く、彼らによってこれまで数多くの発見がなされてきました。

では、幾春別川ではどのような化石がとれるのでしょうか。三笠市に分布する山々は、西から東に向かって古くなっています。すなわち、国道12号線付近は新生代第四紀層、市の中心部は新生代第三紀層、西縁の桂沢湖付近まで行くと中生代白亜紀層からできています。地層は一般に古くなるほど固くて侵食に強いので、東側に行くほど山も高くなってゆきます。そして、幾春別川は市の中央部を東西に流れているため、上流に行けば行くほど、古い地層を横切り、時代の古い化石が見つかることになります。

さまざまな時代の地層が分布していると言っても、すべてアンモナイトや貝がすんでいたような海の地層が分布している訳ではなく、何度も海が浅くなったり深くなったり、時には川で堆積した地層もあります。一番浅くなったのは、第三紀始め頃で、陸地には後に石炭となった植物が生い茂っていました。三笠市は炭鉱が栄えていましたが、それは、この頃に石炭のできやすい地層が堆積したためです。こうして現在の北海道の形が整ったのは、わずか数万年前のことです。

このように、地形と地層は色々なことを物語っており、幾春別川は1億年前から現在までの出来事を我々に教えてくれる、いわばタイムマシーンなのです。

（三笠市立博物館 学芸員 加納 学）

時代			特徴など
新生代	第四紀 約160万年前		・化石はほとんど見つからない。川の地層
	第三紀 約2300万年前	新第三紀 約2300万年前	・浅い海にすむ二枚貝 ・深い海にすむ二枚貝
		古第三紀 約6500万年前	・深い海にすむ二枚貝 ・石炭となる植物が茂り、浅い海や湖に堆積
中生代	白亜紀 約1億年前		アンモナイト、トリゴニア（三角貝）、首長竜、翼竜など。おもにやや深い海だが、三笠湖とよばれる浅い海の堆積もある。

連載 田園暮らしを楽しもう ③

畑一面にアサツキが広がります

夏 大地のパワーが畑にみなぎるとき

北村字豊里 「雪と土に親しむ北の生活館」 秋田谷 英次さん

秋田谷さんの畑は夏、実り豊かな小農園になります。「たくさんの作物が育っています。スイートコーンや枝豆、カボチャ、レタス、アスパラ、イチゴ、プルーンにハスカップ、ブルーベリーもあります」。他にも数え切れないほどの種類の野菜や果物が畑に実ります。

とても不思議なのがアサツキです。刻んでお味噌汁に入れたりするネギの仲間の植物ですが、畑の空き地一面に群生していました。お話では「用水路の設置工事の時に運ばれた土に、タネが混じっていたのかもしれません。あっという間に増えてしまいました」。秋田谷さんが自分で栽培しているものもあれば、このアサツキのように、グズベリーや木いちごなども自生しており、たくましい大地のパワーを感じます。

「植物にとって土は生命の源。幸いこの地は水も太陽の光も十分にあるので、雪が融けると雑草や虫が一斉に活動をはじめます。このような土地だからこそ、作物が元気に育つのです。世界中には雑草も生えない土地がたくさんあるのですよ」と、土などの大地からもたらされる豊かな自然の恵みに感謝しています。

川とわたしの思い出 ①

幾春別川をよくする市民の会
理事 近藤 寛

左股沢上流部

平成9年『幾春別川物語』を発刊することになり、編集委員の一人となりました。市民の会に入会したときから「幾春別川の源流はどこだろう」との疑問があり、これをきっかけに源流を捜そうと決意。当然、幾春別岳のどこかに源流があると決めつけていたのです。

さっそく、平成4年に編集された国土地理院発行の5万分の1の地形図『幾春別岳』を購入。地形図を見ると、幾春別岳から流れ出る沢には、予想に反して左股沢という名称がつき、反対に、南側の夕張方面へ伸びる水系には幾春別川と記載されていたのです。もっとも、これらの水系も3本の枝沢に分かれ、一番長い沢はホロモイ沢と命名されています。そして、この沢の上部は幌向岳。左股沢とホロモイ沢を比べると、ホロモイ沢の方が左股沢より少しだけ流路延長が長い。ホロモイ沢の源流部は標高500メートルの幌向岳、北東約800メートルの幾春別岳、西方500メートル地点と想像されます。さて、どちらの沢を遡行するか、答えは簡単です。やはり沢は、広くて明るい方が気持ちが良い。標高差があり、遡行した先に目標があれば、足どりも軽くなります。ともあれ、初めは左股沢に挑戦することにしました。ところが、行く手には思いもかけない難所が控えていたのです。

（次号に続く）

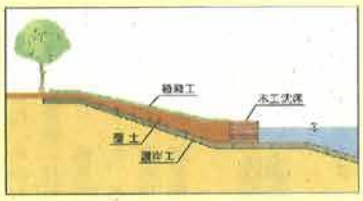
Dr.(ドクター)リバーの何でも調査室

「多自然型工法」

工事を行う場所が自然のなかであれば、自然本来の河川の特徴を壊さないように、あるいは、再生に近づけるよう考えながら行う河川の工事工法のことを言います。

多自然型工法による護岸工事の一例をあげると、川の流れにより河岸が掘られないようにするため、設ける護岸の上に土を被せ（覆土）、そして、その上に植生などを行います（植栽工）。

このような工事を行うことで、洪水から私たちの生活を守るだけではなく、生き物や景観に対して、より自然に近い環境を造るように努めています。



ハスカップ狩りに出かけよう！

美唄市

果物狩りの季節がやってきました！

イチゴやサクランボ狩りなどはいろいろな地域で体験することができますが、「ハスカップ狩りはしたことがない」という方も多いのでは？そんな方はぜひ、美唄市の峰延にお出かけください。

峰延にある8軒の農家がそれぞれのハスカップ畑を開放しています。利用者は好きな農園（右下の地図参照）を訪問して、農家のみなさんが手塩にかけて育てた新鮮なハスカップの実を、直接摘みとって食べることができます。

各農園には無料で入場することができます。持ち帰る場合は1キロ約1、100円。

収穫時期は6月末から7月上、中旬までのわずか2、3週間ほど。甘酢っぱい、爽やかな初夏の味を満喫してみませんか。持ち帰ってジャムなどを作るのも、楽しいですね。

詳しい問合せ先は、JAみねのぶ営農販売部販売二課、電話（0126）・7・2334まで。

美唄市のハスカップの歴史

昭和51年に茶志内地区の5㌶の畑で栽培が始められましたが、本格的な栽培は水田転作の対策として取り組まれた昭和57年からです。

昭和61年には、栽培面積29㌶、生産量は13㌧にまでなりましたが、千歳市や道東の風連町など北海道の各地でも栽培が進み、全道的に生産量が多くなったことで販売が伸び悩みました。「このままではいけない」と、市の関係者や菓子メーカーが協力し、ジュースの原液「ドラキュラの葡萄」が誕生したのです。美唄市のハスカップは、一躍脚光を浴びました。

現在、ハスカップの生産量は全道一で（平成14年調べ）、収穫したほとんどのハスカップは菓子メーカーに出荷され、ジュースやケーキ、ゼリーなどのお菓子の原料に使われています。

ハスカップのはなし

貧血、冷え性、心臓の弱い人にも効果があるといわれているハスカップは、ビタミンAや鉄分、カルシウムが豊富で、昔からアイヌの人たちに「身体を軽くし、不老長寿になる」として食べられてきました。

千歳空港の東南部に広がる勇払原野などの荒涼とした山地に自生しますが、最近は土地の開発などで少なくなってきている貴重な果実です。

和名は「クロミノウグイスカズラ」と言います。「ハスカップ」の語源はアイヌ語からきており、「枝の上になる実」という意味があります。

わがまちの名人

山菜採り名人

石井 猛さん
58歳 岩見沢市

「山菜は山だけでなく、河川敷にもたくさんあるのですよ」と石井さん。幾春別川や旧美唄川、石狩川周辺で山菜を採り続けて30年の名人に、山菜採りの秘訣についてお聞きしました。

― 幾春別川の流域ではどんな山菜が採れますか?

「桂沢ダム付近の一部で時期は終わったと思いますが、ギョウジャニンニクが採れます。石狩川合流点付近や下流の河川敷は山菜の宝庫といえるでしょう。今は（5月中旬）、コゴミ、フキ、ツクシ、エゾイラクサ、ヨモギなどが採れます」。

― 山菜採りの秘訣は?

「丘陵では風の抜け方や向きなど、地形で分かりますね。昨日も月形のほうでしたが、丘陵に囲まれ風が抜けない日当たりの良い地形があったので行きますと、フキが他のところより数倍大きくなっていました。しかし、山などでは必ず目的地点まで尾根を歩き、尾根から30mくらいの範囲で採り、また戻ります。これを繰り返していますから、迷うことはありません。河川でのキノコ採りは流木とか倒れた木が目印となります。しかし、川岸が滑りますので十分に気をつけます」。

― 山菜採りのマナーはいかがですか?

「最近はビニール袋やタバコの吸殻などが見られますね。ゴミは必ず持ち帰る。これが山菜採りのマナーだと思います。また、河川などでは堤防を車で降りないことですね」。

― 採り方やその後の処理は?

「河川敷は、比較的行きやすい場所なので、場所を探したあとは一番よい時期を見計らい、何回かに分けて採りにいきます。場所を見つけるのも山菜採りの醍醐味ですが、私は、採ったのと同じくらいの時間をかけ、一本一本選別するのも楽しみです」。

あいにくの雨模様でしたが、案内していただいた中の橋下流の河川敷で、コゴミ、ツクシ、ヨモギ、そして、みずみずしいフキなどの群生に驚きながら、採り方や見分け方など名人の指導のもと、両手いっぱいの収穫となりました。

連載 幾春別川と渡船 ①

明治の初期、北海道の内陸部にはほとんど陸路がありませんでした。そのため、大きな川などが道路に代わる重要な交通路となり、輸送の主役を船が務めていました。石狩川や幾春別川、幌向川、幌内川などでも舟が通い、人や物を運んでいた時代があったのです。

その後、開拓が進み内陸部にも道路が少しずつ延びていくと、川を行き交う船の姿はしだいに少なくなっていきます。それでもいくつかの川では「渡し舟」という形で、交通手段としての舟がしばらく残っていました。幾春別川流域もその一つです。

明治9年、この地域一帯での初めての道らしきものとして、幌向太～幌内間を幾春別川に沿った刈分道路が作られました。その後、本格的道路として明治11年に幌向太で幾春別川を渡り岩見沢～市来知を経由して炭鉱まで達する道路が造られました。

ところがこれらの「道」は現在のような道路ではなく、川を渡る部分を何カ所も含んだものでした。この道を旅する人は、流れの小さなところでは3本の大きな木を丸太のまま渡した橋を渡ったり、川幅の大きなところでは渡し舟を利用しなければならなかったのです。丸太の橋や渡し舟がどこにでもあるわけではないため、かなりの回り道を強いられることもあったようです。そうしたなかで、幾春別川中流部にも渡船場を設置しようという動きが起こってきました。

（参考文献「岩見沢市史」「三笠市史」）

舟着場跡の標柱

水辺の風景

川原 民也さんの作品「清住えん提」（市来知頭首工）

写真募集

あなたの好きな「水辺の風景」を写してみませんか。

応募内容

- プリント、デジタルデータ、ポジフィルムなど、形態は自由。
- あなたの「想い」など、お送りいただく写真の風景についてのコメントを原稿用紙などに100文字以内にまとめて、写真と一緒にお送りください。
- 順番に「大好き！幾春別川」に掲載させていただきます。
  ※1人何点でも応募可。
  ※写真の返却はいたしません。
  ※応募は随時受付

送付先：下記連絡先
「大好き！幾春別川　水辺の風景係」まで

お便りお待ちしております！

本紙は、楽しい紙面をつくるために読者みなさまからのご意見やご感想をお聞きしております。また、「○○についてぜひ取り上げてほしい！」という話題もお待ちしております。どしどしお寄せください。

【連絡先】
石狩川開発建設部 岩見沢河川事務所内
幾春別川ニュース編集委員会 事務局
〒068-0007岩見沢市7条9丁目
※ご質問の内容は、郵送か、ファックス（0126・25・1697）にお願いいたします。

年間行事予定

●河川愛護月間・空き缶拾い
・開催日：7月3日
・場　所：旧美唄川、桜づつみ公園及び水辺の楽校
・主　催：NPO法人　山のない北村の輝き

●第9回 石狩川下覧樓　川下り
・開催日：7月10・11日
・場　所：石狩川　深川市～砂川市～月形町
・主　催：石狩川下覧樓

●第10回 北海道Eボート大会
・開催日：7月17・18日
・場　所：北村　雁里沼
・主　催：北海道Eボート大会実行委員会

●親子釣り教室
・開催日：7月25日
・場　所：奔別川
・主　催：三笠の湖・川・緑を愛する会

●三笠ダムフェスタ2004＆みかさ遊園まつり
・開催日：7月25日
・場　所：みかさ遊園
・主　催：三笠ダムフェスタ2004＆みかさ遊園まつり実行委員会

●桂沢トムソーヤキャンプ
・開催日：7月31日・8月1日
・場　所：桂沢湖・みかさ遊園及びその周辺
・主　催：桂沢トムソーヤキャンプ実行委員会

●サケののぼる川　地域ふれあい清掃
・開催日：8月上旬
・場　所：狩野橋上流200mから北盛橋の範囲両岸及び花壇
・主　催：幾春別川をよくする市民の会

●第3回 旧美唄川「川をばかる・川を見る・川を知る」
・開催日：9月10日
・場　所：旧美唄川「水辺の楽校」
・主　催：NPO法人　山のない北村の輝き